

第一琵琶湖疏水の第一トンネル東口。木々が水辺の四季を彩る。

琵琶湖疏水はなぜ美しいのか

誕生して百二十余年。琵琶湖疏水といえは

京都市内を流れる疏水本線や哲学の道が有名ですが、

琵琶湖から取水し、長等山^{なからやま}へと流れる大津運河もまた

歳月を重ねて美しい散歩道に。

明治の男たちが残してくれた偉大な遺産を

近江側から眺めて、知られざる美の流れをたどります。



第一トンネル西口の洞門と山県有朋筆による扁額「廓其有容(かくとしてそれかたちあり)」(写真提供/京都市上下水道局)。

新・湖国探訪

近江の
不思議

その29

春は桜、秋は紅葉、抜群の景観を誇る大津運河。
琵琶湖疏水第一トンネルに秘められた美学とは。



大津運河の桜。第一トンネル東口を遠望する。
(写真提供/びわこビジターズビューロー)

※1 洞門…トンネルの入口部分。

琵琶湖疏水といえは京都のもの、
と思ってしまうせんか。たしかに琵琶
湖疏水が京都へと流れ、その事業は
明治半ば、日本人のみで行われた最
初の近代的土木事業として、京都が
誇る国の史跡となっている。しかし、
疏水工事成否のカギを握るといわれ
た難工事の果てに生まれた第一トン
ネルは大津側にあり、二、四キロを超
えるトンネルの全長は建設当時、日
本一の長さだった。

いま大津運河は、明治の男たちが
命がけて取り組んだ大いなる夢に豊
かな水をたたえ、流れ続けている。疏
水沿いを彩る桜並木は、平安の昔か
ら知られる長等山の桜とみごとに
一体化している。その疏水の突き当
たりに見えるのが第一トンネル東口
洞門。そのクラシックなデザインを
目の当たりにすると、明治の男たち

の美意識を感じずにはいられない。
後世のわたしたちは、のちの土木事
業のなかで彼らと同等の美観を次
代に伝えていけるだろうか。

**わが国最初の
大プロジェクト**

第一琵琶湖疏水は明治二十二年(一八
九〇)年、着工から約五年をかけて
完成した。事業に挑んだのは第三代
京都府知事・北垣国道。工事を指揮
した土木技師は、工部大学校(現在
の東京大学工学部)の卒業論文に
「琵琶湖疏水工事計画」を書き、卒業
したばかりの田邊朔郎だった。

第一疏水は大津市三保ヶ崎の取
水口から大津運河をへて、第一トン
ネルに入る。琵琶湖から小関越えで
藤尾まで約三キロ。疏水は藤尾で再
び姿を現すと、山科疏水となって四



琵琶湖疏水は大津市三保ヶ崎から取水
されている。左手に堅田の浮御堂を模
したように見えるのが水位測定施設。



北国(ほっこく)橋と鹿閑(かぜき)橋の間にある
制水門(右)と閘門(左)。制水門で水量を調節し、
流量を安定させている。

ノ宮から御陵(ごみやのみや)そして水力発電所
のある蹴上へと向かう。京都側の疏水
トンネルは、旧国鉄湖西線工事で誕
生した諸羽トンネルを除けば第二
トンネル、第三トンネルと続くが、い
ずれも第一トンネルと比べて短い。
実際に大津から蹴上までの疏水道
を踏破してみれば、第一トンネルが
いかに大変な工事であったかがよく
わかる。

案外知られていないが、琵琶湖疏
水は二本ある。第一疏水の完成後、明
治四十一年(一九〇八)年には早くも第
二疏水工事に着手した。ただし、こち
らは三保ヶ崎の取水口から全線トン
ネルで蹴上に到着するため、疏水の
流れが見えない。一方、第一疏水は長
短二本のトンネルと変化ある疏水の
流れが歳月を重ねてその美観を織
りなす。よくぞ疏水の流れを表に出
してくれたものだと思つ。

**フェノロサがつないだ
疏水と美術**

疏水沿いを歩いて印象的なのがト
ンネル洞門のデザインだが、これは工
事計画の最初から考えられていたも
のではなかったという。田邊朔郎が晩
年に回顧しているが、近代化に邁進
する当時の日本のトンネル工事に、



フェノロサ(1853~1908)は25歳で初来日するや日本
美術のとりこになった。京都で美術奨励を説いた頃は30代
前半の若さ。日本の芸術は世界で第一級であることを教えて
くれた恩人である(写真提供/園城寺)。

美術や意匠という発
想はまだなかった。そ
こに日本人の美意識
のすばらしさを説い
たのが、東京大学で哲
学を教えるかたわら
日本の美に心を奪わ
れた米国人アーネスト・フェノロサで
あった。日本美術の恩人といわれる
彼が、古社寺宝物調査のために京都
入りしたのが疏水工事着工の翌年、
明治十九(一八八六)年。祇園 中村
楼に画家を一堂に集めて「今や美術
を改良すべき時期なり」と熱弁を振
るい、新聞で大きく報じられた。

フェノロサの演説を受け、北垣知事
は美術・美観を京都の将来の財産に
すべく動きだしたが、その一環とし
て疏水工事にも意匠などの芸術性を
取り入れるよう田邊朔郎に提言した
よつだ。そこで田邊が相談したのが、
工部大学校の先輩建築家で、その年
に内務省から滋賀県に出向していた
小原益知であった。滋賀県庁は当時
円満院にあったが、京町四丁目の現
在地に新築移転する計画が進んでお
り、小原はその設計者であった。土木
を専門とする田邊は、建築設計を専
門とする小原にトンネル洞門のデザ
インを相談したかったのだつ。

日本美術の恩人フェノロサの提言がきっかけ？ 疏水工事に導入された“美術”や“意匠”という発想。

※2 『Tunneling』（ヘンリ・S・ドリンカー著）。明治15年（1882年）にアメリカで第2版が出版されたトンネル開削工事のすべてをまとめた書物。参考書として疏水事務所が購入していた。



滋賀県庁旧庁舎と 疏水の縁

トンネル洞門のデザインは、米国の土木専門書『トンネリング』の巻末に掲載されている欧米各地のトンネルデザインを参考にしようとした。そこには疏水の洞門とよく似たデザインがみつかると。たとえば大津運河が流れ込む第一トンネル東口は、スイス・セントラル鉄道（ハーベンシュタイントンネル、藤尾の第一トンネル西口は米国トロイ・アンド・グリーンフィールド鉄道）のフーザックトンネルなど。

なかでも興味深いのは、小原が設



小原益知設計デザインによる滋賀県庁旧庁舎の正面車寄せ。明治21（1888）年に完成し、昭和14（1939）年まで使われた（写真提供／滋賀県・昭和12年撮影）。

計した滋賀県庁旧庁舎車寄せと第一トンネル東口のデザインに類似点が多いとされる点だ。旧庁舎は疏水よりひと足早く、明治二十一年（一八八八）年に完成した。その後、昭和十四（一九三九）年に現庁舎（本館）に建て替えられたため、この車寄せはもう見られない。疏水との縁を推察するものだっただけに残念というほかない。



大津運河が流れ込む第一トンネル東口の洞門（写真上）。スイスの鉄道トンネルにならったベネチア様式の重厚なデザイン。扁額（写真下）は伊藤博文筆「氣象萬千（きしよばんせん）」。北宋「岳陽樓記」からの引用で、千変万化する氣象と風景の変化は素晴らしい、という意味（写真提供／京都市上下水道局）。



第二トンネル東口の扁額は井上馨筆「仁以山悦智為水歎（じんはやまをもってよるこびちはみずとなるをよるこび）」。『論語』からの引用で、意味は、仁者は知識を尊び、智者は水の流れをみて心の糧とする（写真提供／京都市上下水道局）。

疏水散歩の 隠れた楽しみ

欧米では洞門にトンネル名を掲げているだけだが、琵琶湖疏水では洞門ごとに明治の元勳たちが漢文の扁額を掲げ、風趣を添えている。こうした扁額は疏水建設以前にも、明治十三（一八八〇）年完成の東海道本線（旧線）旧逢坂山トンネル、北垣知事が最初に手掛けた山陰道老ノ坂トンネルに見られる。だがこの二つのトンネル洞門は石積みそのまま、意匠は施されていない。フェノロサ入浴を契機に、美術界だけでなく社会にも芸術を志向する新しい気運が高まったとみていいだろう。

疏水の流れに沿って大津から京都まで、トンネルの出入口に明治の元勳たちの書を鑑賞できるのは、琵琶湖疏水散歩の隠れた楽しみである。トンネルのデザインは欧米にならったものであっても、伊藤博文、山県有朋ら内閣制度草創期の首相や主要大臣六人が選んだ漢文と書の味わいが洞門を日本的な顔にしている。日本人の美意識を愛したフェノロサに捧げるデザインに思えてくる。日本が西洋文明に傾倒した明治時代、日本画や日本美術の優れてい

小関越えに残る謎の物体？

謎学サプリ

第一堅坑（たてこう）と呼ばれるトンネル工事の跡が現在も残っている。場所は、大津・長等神社そばから小関越えで峠の地蔵堂を越え、分岐左手の山道を藤尾へ下る途中にある。あまりの迫



第一堅坑は想像以上に巨大な遺跡だ。

力に驚くので、見逃す心配はない。ここが藤尾の疏水出口からトンネル全長の3分の1地点にあたる。地上から見ると部分がわすかだが、堅坑の深さはなんと地下45.5m。ここから空気と日光を取り入れながら、大津・藤尾の双方向へ掘り進んだ。大津・藤尾の両口からだけでなく計四方向から掘ることで、工事の進行を早めた。とはいえ堅坑を掘り下げること自体が地下水を汲み出しながらの最大ともいえる困難さで、一日平均21cmしか掘り進めなかった。のちに掘られた第二堅坑も藤尾の民家裏に残る。



フェノロサの墓は彼が親しんだ山寺、法明院奥の墓地にある。ロンドン滞在中に逝去し「三井寺に帰りたい」との遺言によって、この地に墓碑が建てられた。

ることを提言し、危機的状況にあつた文化財を救ってくれたのがフェノロサである。彼は第一疏水の開通年に帰国したが、二度目の来日の際には三井寺法明院に滞在した。近江をこよなく愛した彼は、大津運河を見下ろす法明院に眠っている。

参考資料「琵琶湖疏水の100年（叙述編）」
京都新聞社編 京都市水道局一九九〇

※3 元勳…明治維新に大きな勲功のあった人。
※4 扁額…室内や門戸にかかせる横に長い額。

Profile 文●黒田正子（くろだまさこ）

編集者・エッセイスト。京都人も知っていないので知らない身近な“不思議”を追跡する『京都の不思議』『京都の不思議II』を出版。著書はほかに『京都語源案内』『それは京都ではじまった』（いずれも光村推古書院）。